



くすい箱

| | |
|-------|--------------|
| 発行 | 桐生厚生総合病院 薬剤部 |
| 発行責任者 | 河井 利恵子 |
| 編集担当者 | 金子 康子 |
| | 矢古宇 由佳 |

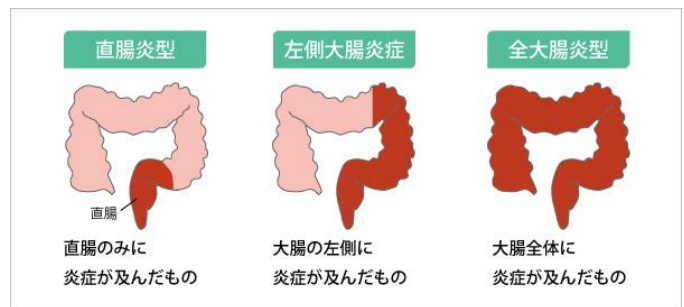
第 62 回目のテーマは、潰瘍性大腸炎です。

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜(最も内側の層)にびらん(ただれ)や潰瘍ができる大腸の炎症性疾患です。腹痛や下痢、血便、体重減少などの症状が現れ、一度発症してしまうと、良くなったり(寛解)悪くなったり(再燃)を繰り返します。

今回は潰瘍性大腸炎の薬物療法を中心に話します。

潰瘍性大腸炎の分類

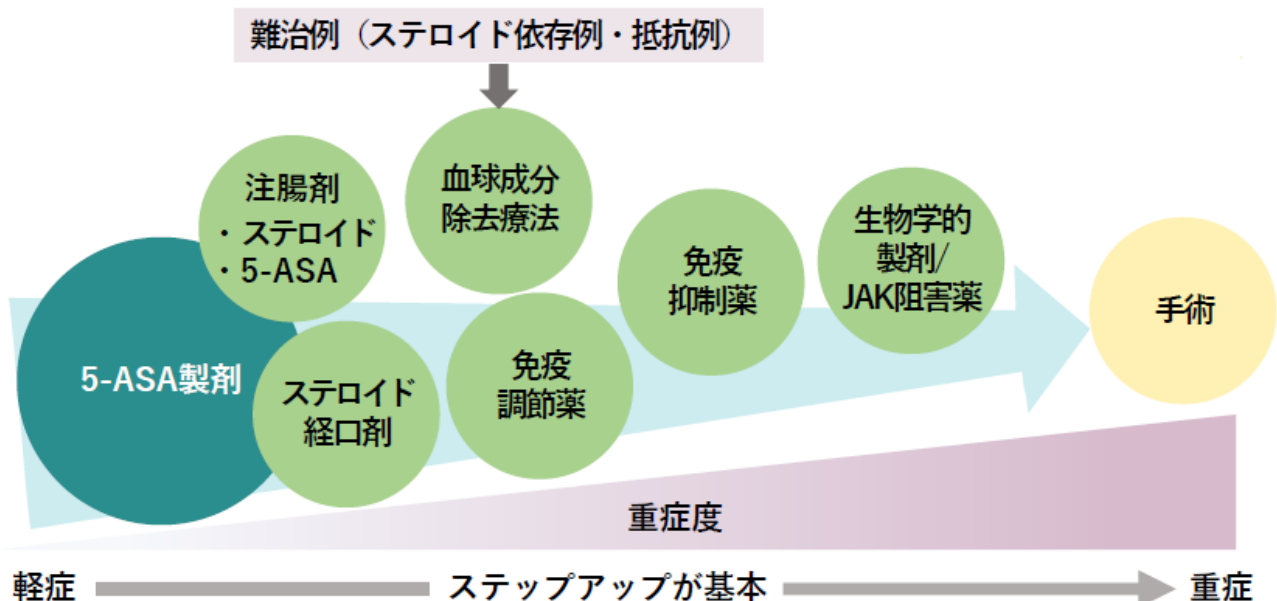
最初、炎症は直腸に起こることが多いのですが、次第に広がり、大半で大腸全体に炎症が広がります。治療が不十分で病期が進行すると、大量に出血したり、腸管が破れるなど重篤な状態になることがあります。この病気は病変の広がりや経過などにより下記のように分類されます。



- 1) 病変の広がりによる分類：直腸炎、左側大腸炎、全大腸炎
- 2) 病期の分類：活動期、寛解期
- 3) 重症度による分類：軽症、中等症、重症、激症
- 4) 臨床経過による分類：再燃寛解型、慢性持続型、急性激症型、初回発作型

潰瘍性大腸炎の治療薬

軽症～中等症にはまず 5-ASA 製剤が使用され、重症度が進むに従い、ステロイド、免疫調節薬、免疫抑制薬、さらに生物学的製剤、JAK 阻害薬へと治療を強化していくステップアップ療法が基本とされています。



①5-ASA 製剤 (ペンタサ[®]、アサコール[®]、リアルダ[®]など)

潰瘍性大腸炎の基本薬で、飲み薬や坐薬により、持続する炎症を抑えます。炎症を抑えることで、下痢、下血、腹痛などの症状は著しく減少します。軽症から中等症の潰瘍性大腸炎に有効で、再燃予防にも効果があります。

②副腎皮質ステロイド薬 (プレドニゾン[®]など)

飲み薬や坐薬、注射薬があり、炎症を抑える力が強く、即効性があるため、中等症から重症の患者さんに用いられます。使用が長期に及ぶと、骨粗鬆症や感染症といった様々な副作用が生じやすくなるため、定期的なモニタリングが必要です。

③アザチオプリン (イムラン[®]、アザニン[®])

免疫調節薬とも呼ばれ、ステロイドなどで腸炎を抑えた後に、寛解状態を維持する効果に優れています。また、後述するレミケード[®]と併用することでレミケード[®]の治療効果を高めることもできます。



④カルシニューリン阻害薬 (プロGRAF[®]など)

免疫抑制薬である本剤は、白血球による炎症物質の合成や放出を抑えることで、強い抗炎症作用を発揮し、ステロイドを使用しても症状がしっかり改善しない患者さんに用いられる薬です。用量調節のために頻回に採血を行い、血中の薬物の濃度を調節します。ある種の抗菌薬や、利尿薬、グレープフルーツなどの食品が血中濃度に影響を与えるため、一緒に飲んでいる薬や食事に気をつける必要があります。

⑤生物学的製剤 (レミケード[®]、ヒュミラ[®]、エンタイビオ[®]、ステラーラ[®]など)

化学的に合成したものではなく、生体が作る物質(タンパク質)を薬物として利用する薬です。従来治療ではなかなか炎症を抑えられない場合に用いられる強力な治療薬です。寛解の導入だけでなく寛解の維持にも用いられます。なかには、医師の許可があれば自己注射可能な薬剤もあり、通院に伴う時間的な制約や負担が軽減でき、ライフスタイルに応じた治療が行えるものもあります。



⑥JAK(ジャック)阻害薬 (ゼルヤンツ[®])

免疫細胞の中のJAK(ジャック)といわれる伝達経路を阻害することで、炎症を活性化させるサイトカインという物質の過剰な産生を抑えます。寛解の導入だけでなく寛解の維持にも用いられます。

最後に...

現在のところ、潰瘍性大腸炎は原因が解明されておらず、完治する治療法はありません。しかしながら、規則正しい生活と薬の服用で長期間にわたり寛解を維持し、発病前と同じような生活をしている人はたくさんいます。寛解を維持するためにも継続的な治療が必要になり「自己判断で止めないこと」が重要です。



《参考資料》

公益財団法人 難病医学研究財団/難病情報センターHP
国立研究開発法人 国立成育医療研究センターHP
武田薬品工業株式会社 HP
ヤンセンファーマ株式会社 HP

次回は、「小児のワクチン」をテーマに2022年3月発行予定です。